

幼児の学級集団における社会測定的地位と共感性

今 井 靖 親

(心理学教室)

(昭和50年4月30日受理)

ある個人が特定の社会や集団の中で占めている位置 (position) が、社会的価値という観点からとらえられた時、これは社会的地位 (social status) と呼ばれる。いうまでもなく、学級などの集団における社会的地位は、成員相互の力動的平衡関係によって決定されるものであるが Moreno がいわゆる社会測定法 (Sociometry) の理論と方法とを創始して以来、この方法を用いたさまざまな研究がおこなわれている。たとえば、Bonney は、児童を社会測定法によって4段階の社会測定的地位に分類し、最も人気のある児童群と最も人気のない児童群に所属する児童の知能指数および学業成績の平均を算出し、社会測定的地位と知能および学業成績との相関を調べた。その結果、知能および学業成績とも、社会測定的地位の高い者は低い者よりもすぐれているという傾向が見い出されたものの、その相関は、それぞれ 0.32、0.25 であって、学級における人気は必ずしも知能や学業成績などによって一義的に決定されるものではないことが明らかにされた。また、Young & Cooper は、学級で人気のある児童と人気のない児童の両群に各種の客観テストを施行し、さまざまな要因における両群の差の信頼度を算出した。それによると、年齢、兄弟数、身長、体重をはじめ、家庭環境や学業成績などには差は見られず、性格特性や容姿・容貌などにおいて両群の差が顕著であった (長島 1969)。

Dunnington (1957) も学級における人気者とそうでない者との行動的な差異を研究し、攻撃的な行動と成人との言語的コミュニケーションに両者の違いが見られたことを報告している。さらに、松山(1969)は、児童にソシオメトリック・テストを実施して、社会測定的地位の高い群と低い群に分け、彼らが学級の全成員から、人格・行動特性についてどのように評価されているかを、相互評定に基づいて分析した。その結果、協調性、指導性、根気強さ、公共心、責任感などの特性が、社会測定的地位を規定する重要な要因であることが指摘された。また、神保・菅沼 (1970) は、幼児の学級集団を対象にソシオメトリック・テストを実施し、社会測定的地位の高い者と低い者を各4名ずつ抽出し、両群の家庭における扱われ方、社会成熟度、性格、行動、遊びについて比較をおこなった。その結果、社会測定的地位の低い者は、高い者に比べて、すべての面に指導すべき問題をもっていることが見い出されている。この点に関して、上田・中上・松本 (1961) の研究においても、社会測定的地位の高い児童は、低い児童に比べて、社会的適応のよいことが明らかにされているのは興味深い。

ところで、「他人の思考、感情、行為を自分自身の中に想像的に移し、他人に似た世界を形成する能力」 (Dymond 1949) は共感性 (Empathy) と呼ばれているが、他者の立場に立って感じ、考え、行動する能力、すなわち共感性が高ければ、集団内での円滑な対人行動が期待できるので、共感性の高い者は人気があり、他人から選択を受ける率が高いと思われる。また、逆に、集団内で人気のある者は、成員相互間のコミュニケーションも豊富で、他人の思考や感情に触れる機会も多いので、人気のない者より、共感性を獲得するのに有利な条件下にあることが考えられる。すなわち、共感性の高い者は社会測定的地位も高いことが予想されるのである。

従来の研究には、社会測定的地位と共感性の関係を実験的に検討したものは見あたらないが、Dymond (1949) は、大学生を対象に、共感性の高い者(6名)と低い者(7名)を選び出し、ケース・スタディをおこなって共感性に関する要因の検討を試みている。それによると、共感性の高い者は、一般に他人に深い関心を寄せ、あたたかな気持ちを持っており、友人も多い。これに対して、共感性の低い者は、両親に攻撃的であり、きょうだい仲も悪く、自己中心的で、友人も少ないとされている。Dymondの研究では対象が大学生であるが、Borke (1970)、今井・桶本(1973)、今井(1974)の研究において、共感性はすでに幼児期に芽生えていることが明らかにされている。そこで、本研究では、幼児の学級集団における社会測定的地位と共感性との関係を検討する。本研究の仮説は次のとおりである。幼児の学級集団において、社会測定的地位の高い者は、低い者に比べて、より高い共感性を示すであろう。

方 法

被験者 天理市立樺本幼稚園 A組(年長組)男児17名、女児15名、計32名 B組(年長組)男児17名、女児17名、計34名、合計66名。

実験材料 (1)「喜び」、「悲しみ」、「恐れ」、「怒り」の4つの基本的情緒場面を叙述した短いストーリーを、各情緒ごとに2種類、合計8種類用意した。(2)上記の各ストーリーにおける主人公の行動状況を具体的に描写した3枚連続の刺激図版(8種類で24枚)。1枚の図版の大きさは、19cm×27cmである。なお、刺激図版の3枚めに描かれている主人公の顔には目・鼻・口はなく、白ぬきにされている。(3)ソシオメトリック・テストにおいて、被験者の応答を記録するための記録用紙。(4)各ストーリーごとに被験者の言語反応を記録するための記録用紙。

手続き 実験は幼稚園の応接室を使って個別におこなわれた。(1)ソシオメトリック・テスト：遊び場面に基準をおいた3人制限ソシオメトリック・テストである。まず、実験者が口頭で次のような質問をした。

「○○ちゃんは、お遊ぶする時、このA組(またはB組)の中の誰といちばんいっしょに遊びたいですか」

被験者が、「Aちゃん」と友だちの名前を答えたら、実験者はそれを記録用紙に記入する。そして、「その次にいっしょに遊びたいお友だちは誰ですか」と回答を促し、同様にして3名まで友だちの名前をあげさせた。次に同じ要領で、

「○○ちゃんがお遊びをする時、このA組(またはB組)の中で、いちばんいっしょに遊びたくない人は誰ですか」

と質問し、友だちの名前を3人言わせて、被験者の応答を記録した。(2)共感性の測定：まず実験の最初に、「これから○○ちゃんに短い紙芝居を見せます。紙芝居が終わったら○○ちゃんに聞いてみたいことがあるので、よく紙芝居を見ていてください」という教示を与えた後、各被験者に1組の短いストーリーを話して聞かせ、同時にそのストーリーの具体的場面を描いた3枚1組の刺激図版を呈示した。ストーリーと刺激図版の呈示が終ると、実験者は、

「このお話の中に出て来た『こうじくん』(『さっちゃん』)は、この時どんな気持ちでしたでしょうか」と問い、被験者の回答を逐語的に記録用紙に記入した。その他のストーリーと図版も同様の手続きによって呈示され、被験者の回答が記録された。

結果の処理 (1)ソシオメトリック・テスト：A組、B組とも集団構造マトリックスをもとに、

被験者全員の Isss (社会測定的地位指数) を算出した。(2)共感性の測定：各ストーリーに対する被験者の回答内容を3人の採点者が検討し、主人公の気持ちを的確にとらえた表現をしていると判断された場合には2点を与えた。主人公の気持ちを的確にはとらえていないが、全く誤っているとも言えないような表現の回答に対しては1点を与え、明らかに誤った回答や意味不明の表現に対しては0点を与えた。たとえば、「恐れ」の情緒場面を叙述したストーリーに対する反応において、「こわい」という回答をおこなった場合には2点を、「泣きそうな気持ち」という回答には1点を、「犬にかまれそうになった」という回答には0点を与えた。

実験期間 1974年6月4日～7月3日。

結 果

まず、2つの学級(A組とB組)の集団構造マトリックスをもとに、社会測定的地位指数の高い者、低い者を10名ずつ、合計20名ずつ選び出し、それぞれHS群、LS群とした。

表1はHS群、LS群における情緒場面別の平均共感得点を示したものである。

表1 Isss 高・低両群における情緒別平均共感得点

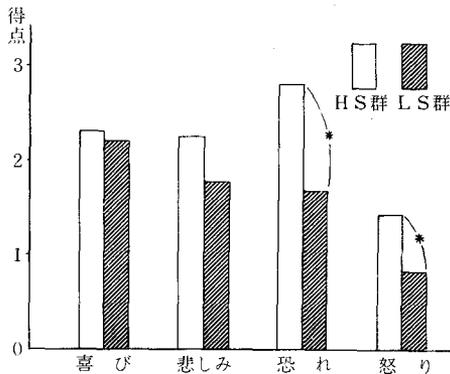
Isss	喜 び	悲しみ	恐 れ	怒 り	全 体
HS群	2.30	2.25	2.80	1.40	8.75
LS群	2.20	1.75	1.65	0.80	6.35

表1から明らかなように、HS群は、どの情緒場面についても、LS群より高い共感得点を示している。そこで、両群の得点差についてt検定をおこなってみたところ、両群の共感得点には5%水準で有意差が認められた($t = 2.07$, $df = 38$)。これにより、本研究の仮説は支持された。

次に、各情緒場面ごとに両群の共感得点を比較してみたところ、「喜び」と「悲しみ」の情緒の共感得点に関しては、両群間に統計的な有意差は見い出せなかったが、「恐れ」と「怒り」においては、それぞれ2%水準、5%水準で両群間の共感得点に有意差が認められた(それぞれ、

$t = 2.56$, $df = 38$; $t = 2.22$, $df = 38$)。

表1の結果を図示したものが図1である。



* $P < .05$

図1 Isss 高・低両群における情緒別平均共感得点

なお、Isss の順位と共感得点の順位に相関があるかどうかを調べるために、学級別に Spearman の順位相関係数を求めてみたところ、表2に示したように、A組では Isss の順位と共感得点の順位との相関は5%水準で有意となった ($r_s = 0.39$, $CR = 2.18$) が、B組のそれは有意とならなかった。

表2 Isss 順位と共感得点順位におけるスピアマンの順位相関係数

A 組	$r_s = .39^*$
B 組	$r_s = .15$

* $P < .05$

議 論

本研究の目的は幼児の学級集団における社会測定的地位と共感性との関係を検討することであった。おもな結果は次のとおりである。(1)社会測定的地位の高い者の共感得点は、低い者の共感得点より有意に高かった。(2)情緒場面別に共感得点を比較してみたところ、「恐れ」と「怒り」の情緒に関しては、社会測定的地位の高い群と低い群の共感得点には有意な差が認められた。しかし、「喜び」と「悲しみ」の情緒においては、両群間の共感得点には有意差は認められなかった。(3) Isss 順位と共感得点順位の間には、1つの学級では有意な相関が認められたが、他のもう1つの学級では両者の間に有意な相関は認められなかった。

以上の結果にもとづき、若干の考察を試みてみたい。

表1から明らかなように、Isss の高い群の幼児は、低い群の幼児よりも有意に高い共感得点を示した。このことから、本研究の予想どおり、社会測定的地位の高い者は共感性も高く、また社会測定的地位の低い者は共感性も低いと言うことができる。

ところで、本研究の実験に参加した2つの学級について、集団の構造を調べてみたところ、Isss の低い群の被験者は、A組では10人全員が、またB組では19人中8人が、いわゆる孤立児または周辺児と呼ばれている者であった。孤立児も、周辺児もともに他との相互選択が皆無であり、特に孤立児は他からの被選択のない者である。荻野(1964)、吉川(1973)によれば、幼児集団における孤立児は、他との言語的コミュニケーションが乏しく、他からの働きかけに反発したり、これを無視したりする傾向が強いことが知られている。彼らは単に周囲の者との接触や交渉が少ないだけではなく、積極性、明朗性に欠け、適切な対人行動がとれないのである。孤立児のこうした性格・行動面の特性が、彼らの社会測定的地位を低下せしめる要因となっていることは、上記の荻野や吉川の研究結果からも明らかである。しかし、社会的地位が低い、すなわち自分が友人から受容されていない、あるいは選択されていないという認知が、逆に孤立的児童の不適応行動を強化している面も見のがしてはならないであろう。

次に、情緒場面ごとに被験者の共感得点を検討してみたところ、表1に示したように、Isss の高い群では、低い群よりも、すべての情緒について高い共感得点を獲得しているが、「喜び」や「悲しみ」のように、両群に統計的有意差の認められないものもあった。Feshbach & Roe

(1968)、Borke (1971)、今井・桶本 (1973) などの研究でも、情緒によって、比較的共感の容易なもの、比較的共感の困難なものがあることが報告されている。たとえば、今井・桶本 (1973) では、「喜び」は比較的共感の容易な情緒であり、「怒り」は比較的共感の困難な情緒である。本研究においても、「喜び」や「悲しみ」に対する共感是被験児にとって比較的容易でそのために成績にはほとんど差が生じなかった、と考えることもできよう。これに対して、「怒り」と「恐れ」に対する共感とは比較的困難なため、共感性の高い者と低い者との間にかかなりの差が生じたのかもしれない。もちろん、本実験における共感性の測定は、各情緒場面を叙述したストーリーと、その内容を描写した各3枚の刺激図版の理解度に依存しているため、情緒別の共感性については、材料自体の難易度を考慮に入れ、さらに詳細な検討を加える必要がある。

2つの学級について、Isss 順位と共感性の順位との相関を求めてみたところ、A組では両者に有意な相関が認められたが、B組では有意な相関が認められなかった。すなわち、A組では、Isss の順位の上位の者は共感性の順位も上位にあり、Isss の順位の下位の者は共感性の順位も下位にあるという結果が得られたのであるが、B組では Isss 高低の順序と共感性高低の順序は必ずしも一致していなかった。そこで、2つの学級について、集団構造マトリックスやソシオグラムをもとに、その集団構造の相違を検討してみたところ、まずA組には6つの下位集団があり、そのうち1グループだけが成員5人で、あとの5グループは2～3人の小さな集団である。また、周辺児が10人、孤立児は5人で、両者を合わせると学級成員のほぼ半数を占めている。田中 (1970) の学級集団類型によると、A組は「多数分離型」と言えよう。これに対して、B組は8つの下位集団から成り、そのうち2グループは成員が5人、1グループが成員4人で、残りの5グループが2～3人のグループである。また周辺児は7人、孤立児は1人で、両者を合わせてもA組のその約半数である。学級集団類型からみれば、B組は「分団分離と多数分離の混合型」と言えよう。このような集団構造の差異が、A組とB組とにおいて、Isss 順位と共感性の順位に異なった結果をもたらす要因となっているように思われる。

以上、本実験の結果にもとづいて、社会測定的地位と共感性との関係をさまざまな面から考察したが、幼児はまだ個人的にも集団的にも発達が未分化であることを考慮に入れても、本研究により、彼らがすでにかかなりの共感性をそなえていること、しかもそれが学級集団における社会測定的地位と密接に関係していることが示唆されたと見えよう。

要 約

本研究の目的は、幼児の学級集団において、社会測定的地位の高い者は、低い者よりも高い共感性を示すであろう、という仮説を検証することであった。

被験者は、幼稚園年長組のA、B2学級の幼児66名である。彼らに対して、ソシオメトリック・テストと共感性の測定がおこなわれた。ソシオメトリック・テストは遊び場面に基準を置いて3人制限選択をさせた。共感性の測定においては、被験者に3枚の彩色画が呈示され、同時に3枚の絵について短い物語が話された。怒り、恐れ、喜び、悲しみの4つの情緒場面について、各2組の絵が用意された。それぞれの絵について物語の呈示が終ると、実験者は被験者に、物語の主人公の気持を述べるように求めた。被験者の回答内容によって、0、1、2点の共感得点が与えられた。社会測定的地位の高い者を20名選び、これをHS群とし、同じく社会測定的地位の低い者を20名選び、これをLS群として両群の共感得点を比較した。

おもな結果は次のとおりである。

- (1)HS群の共感得点はLS群のそれよりも有意に高かった。これにより、本研究の仮説は支持された。
- (2)「喜び」と「悲しみ」の情緒に関しては、HS群とLS群の間の共感得点に統計的な有意差が認められなかったが、「恐れ」と「怒り」の情緒に関しては両群間の共感得点に統計的な有意差が認められた。
- (3)1つの学級においては、社会測定的地位と共感得点の順位相関は有意となったが、他のもう1つの学級においては、両者の順位相関は有意とならなかった。

〈付記〉 本研究に快くご協力くださいました天理市樺本幼稚園の中井秀子園長をはじめ、諸先生方に感謝いたします。また、本研究の実験材料の作成や資料の集収や整理を手伝ってくださった大安寺幼稚園教諭の向出一子先生に心からお礼を申し上げます。

引用文献

- Borke, H., 1971 Interpersonal perception of young children: Egocentrism or empathy? *Developmental psychol.*, 5, 263—269
- Dunnington, M. J., 1957 Behavioral differences of sociometric status groups in nursery school. *Child Development*, 28, 103—111.
- Dymond, R. F., 1949 A scale for the measurement of empathic ability. *J. Consult. psychol.*, 13, 127—133.
- Feshbach, N. D. & Roe, K., 1968 Empathy in six and seven year olds. *Child Development*, 39, 133—145.
- 今井靖親・桶本真也 1973 幼児の共感性に関する実験的研究 奈良教育大学紀要, 第22巻, 第1号, 185—193.
- 今井靖親 1974 幼児・児童における共感性の発達 奈良教育大学紀要, 第23巻, 第1号, 221—228.
- 岩原信九郎 1969 教育と心理のための推計学 日本文化科学社.
- 神保信一・菅沼和恵 1970 幼児の交友関係の発達についての研究 — 周辺児と孤立児の変化について — *児童心理*, 24, 147—155.
- 松山安雄 1969 学級における社会的地位と行動特性の研究 大阪教育大学紀要, 第18巻, 12—23
- 長島貞夫 1969 児童社会心理学 — 性格の社会的形成 — 牧書店
- 荻野惺 1964 孤立児に関する心理学的研究 — 幼児期における — 名古屋大学教育部紀要, 第11巻, 269—279.
- 田中熊次郎 1970 ソシオメトリーの理論と方法 明治図書
- 上田敏見・中上猛・松本倫子 1961 学級集団における児童の社会的地位と適応性について 関西心理学会 第68回大会発表論文集.
- 吉川よし子 1974 孤立児に関する研究 奈良教育大学卒業論文.

RELATIONSHIP BETWEEN SOCIOMETRIC STATUS AND EMPATHY IN KINDERGARTEN CHILDREN

Yasuchika Imai

Department of Psychology, Nara University of Education, Nara, Japan

(Received April 30, 1975)

The present investigation was designed to test a prediction that the S_s with high sociometric status would be more empathic than those with low sociometric status.

66 kindergarten children of two classes were administered a sociometric test and were then measured by their empathic ability. In the sociometric test S_s were required to choose three best and three worst friends in their plays. In the assessment of empathy S was presented three colored-pictures and told a story composed of these pictures. Two sets of three pictures were constructed for each of the following emotional situations: angry, fear, happy, and sad. After the presentation of each story, E asked S to state how he felt about the emotional reaction of the central figure. The degree of empathy was scored 0, 1, 2 points based on S_s statements.

20 of 66 S_s were selected from the highest end of the distribution of the sociometric status scores (HS group) and 20 were selected from the lowest end (LS group). The empathy scores of HS group were compared with those of LS group.

The main results obtained were as follows:

(1) The mean number of total empathy scores for HS group was significantly greater than that for LS group, which was in line with the present prediction.

(2) The mean numbers of empathy scores for the angry and the fear situations were significantly higher for HS group than for LS group, but there was no significant group difference in case of the happy and sad situations.

(3) The rank correlation coefficient (r_s) between sociometric status and empathy scores was statistically significant in one class but not in the other.